

Title	黒崎宏著 『ワイトゲンシュタインの生涯と哲学』
Sub Title	Hiroshi Kurosaki, "The life and philosophy of wittgenstain"
Author	小野, 修三(Ono, Shuzo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.7 (1981. 7) ,p.123- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810715-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810715-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黒崎 宏著

## 『ワイトゲンシュタインの生涯と哲学』

本書はそのタイトルの示す通り、ワイトゲンシュタインの伝記であり、その哲学解釈の書物である。ワイトゲンシュタインに関する邦語文献としては質量ともに現在最高水準を誇る意欲作の出現と言えよう。著者黒崎宏には同じく勁草書房より『科学と人間——ワイトゲンシュタイン的アプローチ』（一九七七年）があり、ワイトゲンシュタインに学び、その影響下に現にある研究者の目に映った現代の科学哲学の諸相が問題にされていた。

前著がワイトゲンシュタイン的なるものに照明を当てたとするならば、本書はまさにワイトゲンシュタインそのものに照明を当てた著作と言えよう。しかし著者も認めるように、このたびの『ワイトゲンシュタインの生涯と哲学』においては、「彼の思想史上の位置とか、哲学および哲学以外の分野への彼の影響など」（三四七ページ）への言及は省かれている。

私の現在の関心は、実は著者が明記し、かつ実際にそうしている本書の守備範囲外へも広がっている。もつと正直に言えば、その守備範囲外の方に私の関心は傾きがちで、その意味で私は極力フェアな評者たらんと努めねばならないのだが、例えば著者が「全体と

してはそれらへの言及をためらわざるを得ない」（四ページ）ものの一つとして挙げてあるジャンクとトゥールミンの『ワイトゲンシュタインのウィーン』（藤村龍雄訳、TBSブリタニカ、一九七八年）を私としては同時代におけるワイトゲンシュタインの位置、つまりカール・クラウスらとの共通意識を問うた著作として、是非とも評価したいと今でも思っている。

以下私は私の関心のありかをも示しつつ、著者の議論のポイントを押えることで、本欄の担当者の責を果したいと思う。

→

本書の論証のポイントの第一は、ワイトゲンシュタインの名を有名にしたあの『論理的—哲学的論考』が何の書であるのかをめぐっている。黒崎は言う。「たしかに、彼が『論考』を書いたときは、『倫理的なるもの』が念頭を去らなかつたと思われる。しかし『論考』そのものを素直に読めば、やはり「この本の意義は倫理的なものである」と言うには、抵抗がある。『論考』自体の構成は、必ずしもそうなっていないからである。」（二四ページ）つまり論考自体の構成から考えると、『論考』の結語として有名な「人は、語り得ぬものについては、沈黙しなければならない」の、その語り得ぬものには「倫理的なるもの」だけが含まれているのだと解釈するには抵抗がある、というわけである。

たしかにワイトゲンシュタインは雑誌編集者フィッカーへの手紙の中で次のように言っている。すなわち、「倫理的なるもの」(eth-

Enlaine)が、私の本によつて、いわば内側から境界づけられているのです。そして私の確信によれば、倫理的なるものは、厳格には、ただそのようにしてのみ、境界づけられ得るのです。要するに、私の信ずるところでは、私は「私の本において」、多くの人々、が今日駄弁を弄している事柄「倫理的なるもの」の全てについて「書かないで」沈黙を守り、そしてそうすることによつて私は、私の本において、それらの事柄「を彼らから救い出し、そしてその全てに、しつかりした場所を与えたのです。」(二二八ページ。なお「」の中は黒崎補。

この手紙からすると、あの「語り得ぬもの」とは、やはり「倫理的なるもの」のことだということになるが、この点に関して黒崎は『論考』の倫理的側面が強調されすぎたのは、あの「フィッカーへの手紙」というのが、実は、ワイトゲンシュタインがフィッカーへの『論考』をいわば売り込むためのものであつたから、なのではないかと思われる。(二三二ページ)という判断を下している。

『論考』そのものに即してみよう。例えば、ワイトゲンシュタインは結語七の二つ手前の六・五三において、「哲学の正しい方法とは、本来次の如きものであろう。語り得るもの以外、何も語らぬこと。したがつて、自然科学の命題以外、何も語らぬこと——それゆゑ、哲学とは何の関係もない事以外、何も語らぬこと——。そして、誰か他の人が何か形而上的な事柄を語ろうとしている時には、常にその人に、あなたは自分の命題の中の或る記号に何の意味も与えていないのだ、という事を指摘してやること」(二一九—二二〇ページ)だ

と述べている。

黒崎はこの個所を引用して次のように言う。すなわち、「彼によれば、「形而上的なもの」を語らんとする命題は、その中に無意味な記号が含まれている事によつて、無意味な命題なのである。即ち、「形而上的なもの」は、本来は言葉になし得ないものであり、したがつてそれも、「倫理的なるもの」と同様に、「語り得ぬもの」なのである。」(二三〇ページ)。

ここで黒崎がわれわれの注意を喚起せんとしているのは、ワイトゲンシュタインがそもそも形而上的なものは無意味だと言つているのではない、という点である。すなわち、ワイトゲンシュタインは「要するに、「形而上的なもの」を語らんとする命題は無意味だ、といつているのであつて、「形而上学的なるもの」は無意味だ、と言つているのではないのである。それどころか『論考』には、「形而上的なもの」があふれている。／＼『論考』は、／＼「世界は、成り立っている事の全体である。」(一)／という命題で始まるが、この「世界」とは、全く「形而上的なもの」ではないだろうか。(二三〇ページ)と。

以上の、ワイトゲンシュタインの『論考』は倫理の書というより、形而上学の書だという黒崎の解釈に関して、私は一面において賛成であり、別の一面においては異議を唱えたいと思う。

賛成の方から言うと、『論考』には形而上的なものがあふれているとの指摘、そして語り得ぬものとして主として考えられているものが形而上的なものであるという指摘である。黒崎は言つてい

る。「論考」は、存在論から始まり、言語論を経て、「命題の一般形式」で頂点に達するところの、一つの壮大な形而上学の書であり、言語論の書であり、知識論の書である、という事になる。一言で言えば、それは、「世界が正しく見えるようにしてくる書」なのである。そして同時にそれは、倫理の書でもあり、人生の書でもあるわけである。」(一四五ページ)。

まさにその通りだと私も思う。世界を正しく見えるようにするのを阻んでいるものこそ、従来の哲学＝形而上学であり、それを形而上学によつて批判するという、つまり一つの形而上学をもう一つの形而上学が批判するという本来の意味の形而上学批判の書が、この『論考』なのである(ただ、世界を正しく見させない従来の哲学あるいは哲学者として、具体的には何のこと、誰のことをウイトゲンシュタインが考えていたのかは、黒崎の本書の守備範囲を越えることで言及はないが、私には興味のある点である)。

そして、この本来の意味の形而上学批判をウイトゲンシュタインがやつていたことに気づかずに、正確に言えば『論考』を形而上学を攻撃する非形而上学の書だと誤解して歓迎したサークルに、ウィーン学団があり、これが周知のように論理実証主義者たちの母体となつていつたのである。誤解がなければ論理実証主義も哲学史のページを飾ることもなかつたかも知れない、というところに歴史の事実があるようにも思われる。

黒崎は言う。「要するに、ウイトゲンシュタインと論理実証主義者達は、ときに一見同じようなことを言つていても、その背景は全

く違うのである。実際、ウイトゲンシュタインは四福音書についてのトルストイの書物に強く影響され、キルケゴールに畏敬の念を持ち、ハイデガーに理解を示している。そしてこのようなことは、論理実証主義者達には考えられない事なのである。」(二〇三ページ)

なお一言しておく、一九二〇年代前半に形成されたウィーン学団の中には、当時すでに『論考』が形而上学であることに気づいていた人物が少なくとも一人はいた。それが後に統一科学運動などを国際的に精力的に展開したオットー・ノイラートである(ノイラートに関しては拙稿「ウィーン学団における科学と政治」、『法学研究』第四八巻第二号を参照されたい)。

一方、異議があるというのは、黒崎が倫理的なるものを領域的なものとしてしか考えていない点である。たしかにウイトゲンシュタイン自身も先のフィッカーへの手紙の中で述べていたように、倫理的なるものを領域的に境界づけられ得るものとして考えている。それに黒崎は即しているだけだと言われれば、それ以上何の言葉もないが、しかし私は倫理的なるものとは、ここからここまでという具合に対象的に領域づけられるものというより、むしろ人間の態度という主体的なものと考えている。

これは私のみのことではなく、少なくともP・エンゲルマン、あるいは先のジャンク、トゥールミンらも人間の態度としての倫理を『論考』の中に見出し出したのだと思う。私はかつて本誌に次のように書いた。「エンゲルマンにしる、ジャンク、トゥールミンにしる、言わんとしているのは次のことである。すなわち、真に重要

ではあるが、しかし語れば虚偽の入りこむ種類のことがらは、語りえぬと表現することで、語るまいと決意するところに、マックス・ウェーバー流に言えば倫理的品位があるのだと、また一方、その決意を公けにすることで、虚偽が入りこんでいるのに入りこんでいないように語るウィーン人の態度を浮き上らせ、カール・クラウス流に言えば現代の偽善を攻撃したのだと、つまりワイトゲンシュタインの『論理哲学論考』は倫理学の書だと、解釈できるのである。」

〔『法学研究』第五二巻第一〇号、二二ページ〕。

つまり、ある一定のことが書かれているから倫理の書だというのはなくて、書いている人間の態度から倫理の書だと考えているわけである。語ると示すとの区別ということ言えば、ワイトゲンシュタインは語るによつてではなく、示すことによつて倫理的だったのではないか。ただ一言しておけば、語らずに示すという時の、その示すことにワイトゲンシュタインは大きなはじらいを感じていたのではないかと私には思われるのである。ワイトゲンシュタインはポジティブになつても出来ることは、「語り得ぬものを暗示する」(三三七ページ)がせいぜいだつたのではないか。

このはじらいという点は、私は少しも否定的な意味で言つてはいるわけではないが、ワイトゲンシュタインの独我論には私は否定的な意味でアマチュアを感じる。

私の世界の限界が私の言語によつて画定されるとすれば——それは当面何によつて限界づけられるのかも構わない、ただ私によつて限界づけられるという点が重要だと評者には思われる——「世界と

は私の世界である」(五・六二)という独我論が生まれる。したがつてワイトゲンシュタインにおいては、「主体は世界に属するのではなく、世界の限界なのである」(五・六三)ということになる。

この独我論は言うまでもなく、カント的認識論の次元の議論ではない。これは存在論である。私はこのワイトゲンシュタインの存在論には組み合わない。私は他者との関係の可能性を考慮した存在論の思弁の方を好む。私はワイトゲンシュタインではなく、A・N・ホワイトヘッドの存在論の側につきたいと思つている。ホワイトヘッドはその『過程と実在』の中で簡潔に彼の存在論を定式化している。「多は一となり、一つだけ増し加える」である。

思想の次元で解説すれば、私の思想は多くの先輩、同輩の思想を吸収し、自らの内部で私自身の思想としてまとめ上げられる。その結果、思想の数は私の思想分だけ、つまり一つだけ増加する。そして次に私の同輩、後輩は少なくとも私以前よりは一つは増加した多くの思想を吸収し(勿論その際に特に私の思想が吸収されるという保証はない)、私の場合と同じように思想の数を一つ増し加える。こういうプロセスを通じて進行するのが思想の運動であり、存在の運動である。この種のダイナミックスをワイトゲンシュタインの存在論は持つていないと私は思う。存在に関する思弁の際には、他者という存在をも説明の中に入れてほしいと思う次第である。

しかし、他者を入れられない所に、私はワイトゲンシュタインのベルゾーンを見る思いもする。そしてその点を自閉症的というような言葉で片付ける気持ちからは私はほど遠い。存在の苦悩に近いの

はワイトゲンシュタインか私かは、自明のことだからである。

(一)

本書の第二のポイントは前期のワイトゲンシュタインから後期のワイトゲンシュタインへの、とくに語の意味はどこから生まれるのかについての考えの変化の問題、言い換えれば彼の『哲学的探究』は何の書かという問題である。

本書第四章「後期の哲学の成立（一九三三—一九四九年）」は、次の文章で始まる。すなわち、「ワイトゲンシュタインの後期の哲学は、一般には、『青色本』から始まるとされる事が多い。それは一つには彼が、『哲学的文法』において未だ引きずっていた『語の意味とは、文法におけるその語の位置である』という見解を『青色本』においてほい落とし、そこから彼の新しい意味論が軌道に乗った、という事によると言えよう。しかし……彼の後期の哲学は『哲学的探究』においてほぼその全貌を現わす……」（二二〇ページ）。

つまり、『青色本』では「語の『意味』とは、現実におけるその語の『使用』であり、その語の『担い手』とか『イメージ』とか『心の状態』とかいったもの、要するに何らかの对象的なもの、ではない、という事である。」（二二〇—二二二ページ）。言い換えれば、ワイトゲンシュタインが『青色本』で行なつたのは、いわば意味の対象理論（二二二ページ）への戦いだつたのだが、にもかかわらず『青色本』では語が文法的に使用されるという風に考えられていた。

この『青色本』は一九三三年から三四年にかけての学期における

ワイトゲンシュタインの口述筆記のノートだつたが、翌学期には別の口述筆記を行なつた。それが『茶色本』と呼ばれるものだが、この本の特徴は「言語ゲーム」である。厳密に言うると、『茶色本』以前にも「言語ゲーム」という言葉は使われていたが、しかし『茶色本』において初めて「言語ゲーム」は言語の形態から生活の形態へと移つたのである。そしてそのことの一層の自覚と表明は、だが『哲学的探究』を待たねばならなかつた。

『哲学的探究』の中でワイトゲンシュタインはこう言つてゐる。

「私はまた、言語とそれが織り込まれる行為の全体をも、『言語ゲーム』と呼ぶことにする。」つまりここでは言語と行為が織りなす一つの織物が「言語ゲーム」として考えられているのである。この織物は生活とも、規則に従うことも、慣習とも、社会とも表現されている。こうした、語の意味を語が使用される具体的な場の中に求めるという考え方の変更には、どんな動機があつたのだろうか。

黒崎は前期と後期のワイトゲンシュタインを比較して次のように言つてゐる。「ここにおいて我々は、『論考』と『探究』のちがいを認めることができる。『論考』においては、誤解を回避するために記号言語が採用せられた。しかし『探究』においては、誤解を回避するために、語の使用についての展望を持つことが実行せられたのである。」（二三二ページ）。また、「かくして『論考』においてと同様に、『探究』においても、哲学はやはり基本的には「言語批判」であることになる。すなわち、哲学は、理論ではなく批判活動であり、戦いなのである。」（二三四ページ）。また、この哲学という批判

活動によつて「我々は呪縛から、迷いから、脱却できるのである。とはいえそれは、何か新しいものを獲得したことでではなく、元の状態、本来の状態に戻つただけなのである。」(三二六ページ)。

黒崎はこのようにウイトゲンシュタインにおける非連続性と連続性の両方を明らかにしているが、黒崎の結論としてはそのうちの連続面の方が重視されている。つまり、M・ウェーバーの用語ならエントツァウベルンク、ウイトゲンシュタインに即せば「ハエにハエ取り壺から脱出する道を示してやること」(『探究』節三〇九)がウイトゲンシュタインの一生涯の課題であつた、というのが黒崎の結論である。ウイトゲンシュタインにおける意味論の変化は、彼の思想の変化ではなくて、その深化に伴なうものだ、ということになる。

本書の著者黒崎とは逆に、ウイトゲンシュタインにおける非連続面を強調する代表選手はB・ラッセルだと言えようが、この問題に關するさまざまな見解を交通整理することにどれだけ価値があるか私にはわからない。しかし非連続面に照明を当てた時には、ウイトゲンシュタイン自身の自己批判などが明らかになつたりしたら面白いと思う。

最後に本書に対する私の不満を二つ述べさせていだいて本稿を閉じたいと思う。一つ目は、著者が明らかにしたウイトゲンシュタインの哲学そのものを、著者自身はどう考えているのだからか。その点への言及が私の見る限り一言もないことに、私はやはりさびしさを禁じ得ない。「私がウイトゲンシュタインの片言隻句に訳もなく魅せられるようになったのは、一五年以上も前のことである」

(二ページ)という文章は私の期待する答えにはならない。

それからもう一つの不満は、著者が本書中で官という言葉を適切に三度使用している点である。ラッセルがウイトゲンシュタインの指導教官になつたという箇所(三二二ページ)、「私の試験官達」の箇所(四七七ページ)、そしてラムゼイが指導教官、ムーアが試験官という箇所(一八〇ページ)である。官という日本語は、戦前的な感覚で言えば天皇から給料をもらつている人間のことを言うわけで、私学の大学教授がなぜ官なのか理解に苦しむ。われわれが指導教授というところを、官学では指導教官と呼ぶ習慣は承知しているが、その言葉を現在私学の教授職にあり、かつ「言語批判による知性の解放」(三二七ページ)をめざした哲学者に傾倒する研究者が、たとえ出身が官学であろうと、誤用するのでは、不満を抱かざるを得ないだろう。

いや、ウイトゲンシュタインに学ぶ社会学者ならば、こうした一定の言葉のさまざまな使用のされ方に着目することで、何らかの社会分析を思いつくかも知れない。A・バーチの「代表」はそうしたアプローチの一例と言えよう。

以上の私の紹介と批評は、実は本書の半分を占めるウイトゲンシュタインの生涯に関する記述にほとんど注意を払つてこなかつた点で、はなはだバランスを欠いたものとなつてしまつた。著者も「本書は、今日私が抱いているウイトゲンシュタイン像を、その生涯と哲学をからませて、一冊の本の中に、バランスよく描き込む、という事を試みたものである」(二ページ)と述べており、まことに著者に

は失礼なことをしてしまつたと思つてゐる。

私は最後に著者への不満を表明したが、そもそもワイトゲンシュタインに指の先も焦げんばかりに打ち込んでいなければ本書をものにするなどできなかつたはずで、著者のその努力には改めて敬意を表する次第である。

黒崎宏『ワイトゲンシュタインの生涯と哲学』（勁草書房、一九八〇年、三五四ページ＋Ⅳ、三五〇〇円）

小野 修三